山東省に於ける六朝の佛教摩崖

道端良秀

一

山東省は兗州を中心として、出來るだけ多く各縣を一通り踏査することに決心して、或る時は徒歩で、或る時はトラックで、或る時は馬で、又或る時は自轉車に乘つて、相當奥地迄踏査を決行した。何分戰時下の事であるから相當の覺悟を要することは當然で、從つて調査し度い處も、都合で行くを得なかつた事も又止むを得ないことである。何ら文獻上では價値のない縣でも、行ける處は大體一應踏査して、令後の便に供するつもりで居た。そのために、文獻にも何もない貴重な資料が思ひがけざる處に在つて、驚き且つ喜ぶことも屢々であつた。

今こゝに於いては、山東調査中に於いて踏査した、六朝時代の佛教摩崖に就いて、一應の中間報告をなし度いと思ふ。と言ふのは鄒縣に於ける佛教摩崖が、餘りにも立派であり、然かも餘り破損もなく、千四百年の佛教藝術をそのまゝ、今日に傳へ、護法の精神が脈々としてその内に流れて居るのに感激を覺へた爲である。

且つ從來佛教摩崖と言へば、泰山の金剛經を第一に數へて、かゝる鄒縣に、かくの如き立派な摩崖のあることを殘念乍ら知らなかつた。それは今日迄殆んど誰一人、この六朝摩崖を詳細に報告紹介してくれた人がなかつたが爲で、兎に角一應この立派な、恐らく支那第一の佛教摩崖と斷言してよい、鄒縣の多くの摩崖を紹介して且つ寧陽、滋陽のそれに及んで見度いと思ふ譯である。

尙この機會に、この調査に當つて、現地の軍關係、縣公署其他より、非常なる便宜と、多大なる御後援とを賜つたことに對して、こゝに厚く御禮申上ぐる次第である。

二

さて摩崖と石經とは時には同一に取扱ふこともあるが、摩崖は岩石の一面、或は表面を平たくして、これに文字を刻み込んであるのを摩崖と言つて居る。大規模である。石經とは石柱とか石板とかにして、それに經典を彫り付けるもので、文字なども小さい。房山の石經とか、山西省風峪の石經とかゞこれである。然し摩崖經典も亦石經の一部門であるから、泰山の金剛經の石經と言つても、鄒縣の般若經の石經と言つてもよい譯である。

さて鄒縣の佛教摩崖と言ふのは、鐵山、鋼山、尖山、葛山、嶧山の五山にあるのである。その内縣城に近い所から見ると、先づ鐵山の摩崖がある。

鐵山は縣城より北方二キロ程の處にある小山で、この山の南面大岩石を殆んど頂上から下迄一面に彫り込んだもので、縱は凡そ二十五六米、飛び距れたものを入れると三十米以上、横は十五米前後の廣さである。一字の大きさ凡そ一尺五六寸、十六行、八百有餘字の金剛經である。相當の急斜面であり、餘り拓本を取つてないことが、よく千四百有餘年の歳月を、そのまゝ保つて居る。

この點泰山の摩崖が餘り有名な爲に、拓本屋によつて荒され、新に文字石をはめ込んだり、摩滅の文字を深く彫り込んだりして、原形を全く失つて居るのがあるのに對して、この鐵山の摩崖石經は、全く昔のまゝの原形を傳へ、且つ摩滅も少く、その規模の點に於いても、將しく泰山以上と考へられ、支那第一の佛教摩崖と言つてもよいであらう。

この金剛經摩崖の下の方少し距つて、岩石に一群の人名が刻み込んで、「僧安道壹」或は「閭長嵩」などの文字が見へる。摩滅して少し字が見へない部分があるが、「山東通志」一五〇によると、

寧朔將軍大都督任
城郡守經主孫洽
東嶺僧安道壹著經
齊搜揚好人平越將軍周
任城郡主簿大都維那
閭長嵩

とある。これによつてこの摩崖が任城郡主孫洽、及び任城郡主簿都維那閭長嵩、僧安道壹なるものが、經主とな

りこれを作り出したと言ふことを知る。この僧安道壹の名は後の尖山のそれにも出て來るから、彼がこれら摩崖の本願主であつたやうである。然し彼が如何なる人か今こゝでは不明である。

尙この金剛經に引續いて、稍々小字で文字が刻してある。これは相當摩滅して讀むを得ないが、頌の字が見へるから、これは『金石書』によく出て來る、北周の匡喆刻經頌である。石頌と上に大きく彫つて、以下刻經頌十二行五十一字總て六百餘字を刻して居るのである。大象元年のものであるが、年號も判然しない。全部が大象元年に出來たものか、金剛經が先に出來て居て、この頌は後に出來たものか、尙不明である。同時と言つても、前後と言つても、この般若經が尖山と同じ北齊の武平六年頃とすれば、大象元年は僅か四年後である。

三

第二の鋼山或は岡山は、この鐵山の後、卽ち北方僅か一キロ位のすぐ裏にある、岩石磊々たる岩山で、高さも大きさも鐵山の比ではなく、標高四百米位であらうか。麓に十戸ばかりの小村があつて、山の中腹に玉皇廟が立派に立つて居り、二人の道士が居て御茶の接待をしてくれた。この玉皇廟から路を右に取つて、登つた處に所謂岡山の摩崖がある。

さてこの岡山の摩崖は、他の鐵山や尖山其他の摩崖とは多少趣きを異にして居る。それはこゝの摩崖經典は、磊々たる大石の一つ々々に、一字二字、或は三字四字、或は五字十字十五字と、あちこちの岩石に、飛び〳〵に經典の文字を刻んで居ることである。然かも側面に彫つたり、頂上に彫つたり、底部に彫つたり、或は東を向ひたり、西を向ひたり、又は南北互に向ひ合つたり、背合せになつて居たり、飛び〳〵に遠くに離れて居たり、全く亂雜を極めて居る。

而してこの摩崖石は凡そ二十箇程と思はれるが、文獻にあり乍ら、探しても見るを得ないのもある。思ふにこれは往時は恐らく、一處に順序よく、刻み込んだものであらうが、永い歲月の間に或は顚落し、或は動いたりして、今日の如き亂雜を示すやうになつたものではあるまいか。從つて土中に埋まつて居る底部にも、摩崖石經があるかも知れぬ。このやうに解釋せねば、餘りにも亂雜

無秩序過ぎるやうである。

經典は般若經で、文字數凡そ三百と言つて居るがそれ以上である。而してこの文字には明らかに二系統がある。頂上に「他方佛土俱來集會是諸菩薩具足無量自在」と三字六行に書し南面して、立派な端正嚴格な文字がある。この一群の摩崖と離れて別の摩崖の一群がある。同じく岡山の摩崖と呼んで居るが、明かに別系統のものである。文字も彼の端正嚴格なものではなく、雄麗なる六朝風の鐵山のそれに似て居るものである。『山東通志』でも前の「他方佛」のものを北齊に入れ、この摩崖は年號の通り北周として居る。『山東通志』は「他方佛」石より東三里と言つて居るのは、白髮三千丈式である。同じ岡山であり、東方に面して居る山腹のことで、精々五十米位距つて居る位である。

この岩石は『山東通志』は「鷄爪石字經」と言つて居るやうに、斷崖絶壁の一石の三面に寫經されて居るその岩石の上に、宛も冠の如く、鷄の爪と言へば言はれる光つた石を載せて居ることである。然かもこの摩崖は珍しくも般若經ではなく、觀無量壽經の序文が兩面に刻せられて居ることである。摩崖と言へば殆んど、般若經のみである中に、かうした淨土教典たる觀經の摩崖石があることは、甚だ興味あることであり、この時代を知る貴重な資料である。從つて今後この摩崖石を觀經石と呼び度い。

この觀經石の一面には「比丘惠暉、比丘尼法會、大象二年七月三日、比丘道成、釋迦文佛、彌勒尊佛、阿彌陀佛」云々と書かれて居て、この觀經石が、明かに北周の大象二年七月三日に出來たことを物語つて居る。この觀經石の續きの南側の大岩石の表面に、東面して四行十三字、及び七行八字の經典が刻せられて居るが、これも觀經石と同系統と見るべきであらう。

四

第三は尖山の摩崖である。尖山とは俗稱らしく地圖を開いて見ても何處にも見當らない。聞いても知らないと言ふ。色々の地圖を集めて見て初めて、今の朱山が尖山に當ることを知つた。成程朱山は尖つた山である。縣城より東北方六キロ程もあらうか、四百米位の圓い尖つた山である。

尖山の摩崖と言つても、然しこの山頂や山腹にあるの

ではない。全く方向の異つた、これより一キロ程も東方にある大佛嶺と言ふ、一丘陵にある譯である。丁度遠く東北方の四基山下の、孟子林に孟子墓を詣でゝ、その歸途、尖山の摩崖を調査すべく、この尖山を目標にトラックを走らせて居たが、一丘陵の頂上に於いて、支那側の一警備隊長が、こゝにも何か文字が彫り付けてあると言ふのを聞いて、兎に角一應見ようとて、トラックを降りて見たのが、何んと目的の尖山の摩崖なのである。偶然とは言ひ乍ら、うまく尋ね當てたことを喜びつゝ調査した事である。若しかすると、あの高い尖山を上たり下つたりして、此處彼處と探し歩き、一日中尋ねあぐんで、空しく歸らねばならなかつたかも知れぬのに、幸ひ四基山方面から來て、この大佛嶺を通つたのが幸運にも、何の苦勞もなく、この摩崖を調査し得たことは、何としても喜びに堪へない。

何故この丘陵の摩崖を尖山と呼ぶか、精しくは、こゝは大佛嶺と言はれて居るから大佛嶺の摩崖と言つた方が、今後の間違ひもなく、その方が眞實である。尖山は遙かに遠い。或はこの丘陵を尖山の一部と見て、かく名付けたものであらうが、間違易いことである。然し他の鐵山・岡山等の摩崖に對して、大佛嶺と云ふよりも矢張尖山と言つた方がよいとすれば、それでもよい。兎に角尖山その山でないことさへ明瞭になればよい譯である。

さてこの大佛嶺は全くの自然の丘陵で、岩石の丘陵と言ふのではない。自動車はこの丘陵上を通路として居る程である。この道路の西側を岩石傳ひに下ると、一つの大きな岩石が横はつて居る。めざす敵はこれなのである。長さ約三十米、幅五米から八米位、高さ二米程のもので、その上表面に文殊般若經が書かれて居るのである。

文殊般若の四字が二行、凡そ一米平方弱の大きさで書かれ、その下に八行十四字の般若經が書かれて居る。四行目迄は僅かに讀み得るが、後は摩滅して見へない。又下部の方にこれはすばらしい大字を以て大空王佛と一行書にしてある。一米半平方もある。この下に又般若經を續けて、十行十三字書かれて居るが、これは全部完全に讀まれる。

この摩崖には年號もあり、又經主などの題名を判然と書いて居て何ら誤がない。文殊般若と書いた大字の右端

に、「大齊武平六載乙未六月」の年號が見へ、文殊般若經の下に、「大都經佛沙門僧安道壹佛主大發心經主漢大丞相十八世」云々と見へ、又「經主韋子深妻徐法仙」云々とも見へ、「經主尚書晋昌王唐邕妃」云々とも見へて居る。更に岩石の頭とも云ふべき處にこれのみ南面して、「沙門僧安道壹」と刻してある。

以上によつてこれが北齊の武平六年に出來たこと、經主として韋子深一族や、唐邕一族が加はつて居ること、又佛主として僧安道壹がこれに主役を務めて居ることが分る譯である。さて然らばこの書は誰の手になつたかである。「山東通志」は徂萊山、水牛山と同じく王子椿の筆として居るが、この題名には王子椿の名はない。有名な書家として唐邕の名があり、又韋子深の名もある。恐らく彼等の誰かによつて書かれたもので、「泰山志」は泰山も尖山も共に韋子深のものとして居るのは、何を根據としたものであらうか。何れにせよ、皆よく似通つて居るのである。尚充分の研究を要するが、鐵山にも安道壹の名があり、此處にも亦彼の名が出て、然かも重要なる佛主となつて居ることは、この摩崖經典が、恐らく彼の發願になつたものであらうことを物語つて居る。

尚尖山の摩崖として、この石の東方、丘陵の頂上に、丁度深い湯飲茶碗を伏せたやうな圓い石が三つ並んで居る。その一つに「諸行無常、生滅……、寂滅……、韋王振」云々と他三字程の文字が見へる。四句謁を刻んだものであらう。こゝに何かしら雪山童子に似たやうな場面が、北齊の頃に展開されて居たやうな氣がする。

尖山摩崖の出來た武平六年と言へば、北周の建德四年で、長安を都とせる北周では、前年建德三年に廢佛道二教の令を下して、佛教壓迫にかゝつて居る最中なのである。北周と境を接し、何日如何なる運命の下に置かるゝとも知れぬ北齊の佛教徒も、隣國の廢佛に備へて、令法久住の護法精神より、かゝる岩石を選んで佛教の聖句を刻み、經典を刻したものであらう。

佛教徒の不安な豫想は誤なく、餘りにも早くやつて來た、二年後の建德六年には早くも北齊は北周の爲に亡ぼされ、廢佛令はこの地にも布かれ、堂塔伽藍は破却され、經像は燒却された。が然し石に刻める經典はそのまゝ保存された。俄かに燒却することも、破棄することも出來

ぬからである。この廢佛の又二年後に出來たのが、鐵山の摩崖であり、岡山の觀經の石經である。尖山と同じく僧安道壹の發願らしく、こゝに彼れ道安壹の尊き姿をこの石の內に拜むことが出來て、感激そのものである。

五

次は葛山である。これは縣城より東六十支里と言はれ、大象二年の般若經と言へば、大體岡山や鐵山のそれと同系統のものであることは一應想像がつく。こゝは未だ狀況の充分ならざるを以て、踏査不可能であつた。

次に嶧山であるが、こゝは縣城より南三十支里と言はれて居る所の、鄒縣第一の山である。始皇帝もこゝに登り、孔子も亦こゝに登つたと云ふ遺蹟の山である。孔子が「東山に登りて魯を小とし、泰山に登りて天下を小とす」と言つた所謂魯の東山とは、この嶧山だとも言はれて居る。

汽車は兩下店に降りて、三十分行程にして山麓の村に達する。流石に嶧山は山らしく、所謂岩石峨々として、突兀として聳ゆると言つてよい。全くの岩石の山である。奇岩突兀、全く見事である。頂上迄約一時間餘、山には堂々たる立派な玉皇廟がある。文殊般若の摩崖は、この廟より遙か下の方、登山路より横にそれた處にある譯で、普通の人に尋ねても不明と言ひ、廟の道士に色々と尋ねて、初めて分り、道士がこゝに案內してくれたのであつた。

摩崖經典は、大きな突立つた大岩石の側面に書かれて居るもので、高さ四米程、横二米半位である。場所は頗る危險で、よくもこんな處を探し出して書いたものかなど、驚嘆せしめられる。文字は七行十四字、大きさは鐵山より稍々小さいが、字體は水牛山のものに似て居た。その側に妖精洞と云ふ、西遊記にでも出て來そうな名前の洞があつて、觀音樣が祀られて居る。

普通に鄒縣の四山と言つて、鐵山、岡山、尖山、葛山を言つて、嶧山を云々しないが、嶧山の摩崖も亦六朝のものとして、實に立派なものなることを紹介する譯である。

六

鄒縣以外に六朝摩崖として、餘り紹介されて居ないものに、寧陽縣水牛山がある。水牛山は縣城西三十支里、

汶上縣境に横はる一大岩石で、長さ二百米位、高さ二十米位の牛の伏せるが如き形の山で、その中間南面して一つの洞があり、その入口の右側に、文殊經の一句が彫られて居る。六行五十二字で、明かに六朝である。或は尖山と同じと言ひ、或は泰山とも同じだと言はれて居るが、これは嶧山のそれと同一筆法である。皆同一系統のものと見てよい。この水牛山の山上にも文殊般若の石碑があつて、これ又六朝のものと言はれて居る。

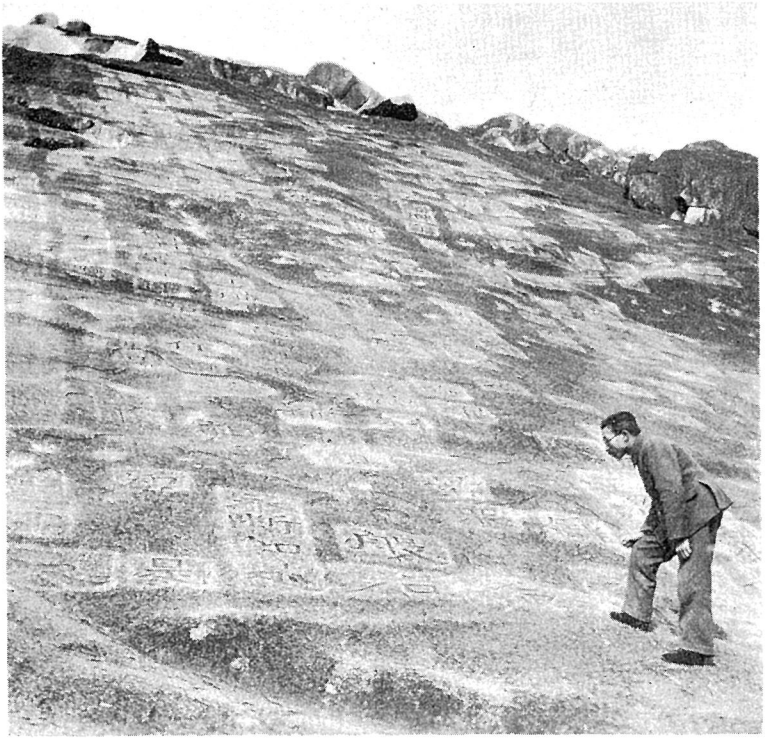
次に六朝の佛教摩崖として、頗る貧弱だが、滋陽縣嶧山にも摩崖がある。兗州から西三十支里、一丘陵の岩石よりなる嶧山の頂上に、二米に三米程の間に文字が書かれて居る、殆んど摩滅して見るを得ないが、「僧懐道」などの文字も見へ、その感じが六朝である。

この外に上來屢々出て來る泰山の金剛經があり、又泰安縣徂萊山の般若經がある。これは年號も書かれ、王子椿の名もあるから、何ら疑ふ餘地はない。この二摩崖に就いては先輩が多く、紹介されて居るからこゝで改めて紹介する必要はない。

七

以上略々山東省に於ける隨唐以前、六朝の佛教摩崖に就いて略述した、全くの中間報告で、充分なる文獻も何もない處に於いての記述であるから、思ひ違ひや記憶の誤があるかも知れぬ。何れ又改めて詳細に發表し度いと思ふ。（昭和十七年六月、兗州にて）

崑摩の山尖



崑摩經若般の山鐵

石經觀の山岡

崖摩の山岡